

九品官人法の制定について

越 智 重 明

は し が き

現在、九品官人法、九品中正などと称される選挙法は、魏王朝成立の直前に始めて制定され、以後隋時代まで続いたものである。その性格はいくたびも大きく変つてゐるが、最初から魏の嘉平の初めごろ州中正の制が制定されるまでの期間は、一応最初の制定の目的にそつた運営がなされていたとされよう。

本稿では、まず、そうした新選挙制度が当時九品などとよばれた実情を明かにし、つぎに、新選挙制度制定の目的が、(一)機構的に中央において人事を掌る「人事官」が全国的規模において百官の人事を掌れるようにすること、(二)(それにかからんで)(後)漢時代の選挙制度がもつていた弊害を除くこと、すなわち(後)漢時代の選挙制度は、機構的に選挙者と被選挙者との間に私的結合關係を生ずる可能性をもつていた。そこに生じた私的結合關係は、党錮の禍のように(少なくとも結果的に)皇帝の支配力の滲透を妨げるべく機能することが多かつたが、そうした弊害を抜本的に除くこと、にあつたのを追求し、さらに、初期に視点を置いたその実施状態を考察する。⁽¹⁾

第一節 名 称

後漢極末、延康元年に制定された新選舉制度は、旧来九品官人法とか九品中正（制度）とか称されている。これらの称呼はよくその実態を示すものであるが、その制定時乃至存続時にはそのようには呼ばれていなかったようである。そうした称呼はかなりのちに生じたと考えられる。本節ではそのことを瞥見する。

魏志^{卷十二}陳羣伝に、陳羣について、

文帝在東宮、深敬器焉。待以交友之礼。……及即王位、封羣昌武亭侯、徙為尚書、制^{シム}九品^ヲ。官人之法、羣所建也。

とある。ここでは九品と官人之法とが一応別個のものとされているとすべきである。（右の「制九品官人之法」を九品官人之法を制す、と読むのは無理で、「制九品」は上にかかり、「官人之法」は下の「羣所建也。」にかかるとすべきである。）いま取りあげている選舉制度を九品（の制）と表現する事例は数多い。例えば、魏志^{卷十三}常林伝の注に、

時國家始制九品。各使諸郡擢置中正、差敍自公卿以下至于郎吏功德材行所任。

とあり、太平御覽^{卷二百六十五}職官部六十三中正の項に、

傅子曰、魏司空陳群始立九品之制。郡置中正、詳次人材之高下、各為輩目。云云。

とあり、晉書^{卷四十六}李重伝に、

（李重）上疏曰、……九品始於喪乱軍中之政。誠非經國不刊之法也。云云。

とあり、宋書^{卷九十四}恩倖伝に、

漢末喪乱、魏武始基。軍中倉卒、權立九品。蓋以論人才優劣、非為世族高卑。云云。

九品官人法の制定について 越智

とある。九品（の制）という表現は、その選挙制度の骨格が、九等に分けられた官品と同じく九等に分けられた郷品とのからみあいにあるに基くとされよう。⁽²⁾ なお、こうした選挙制度では当然中正が大きく機能する。それだけに九品（の制）が中正を大きく意識しつつ取りあげられることもある。晋書^{卷四十五}劉毅伝に、

毅以、魏立九品、權時之制。未見得人、而有八損。乃上疏曰、：今立中正、定九品。云云。

とあり、晋書^{卷三十六}衛瓘伝に、

瓘以、魏立九品。且權時之制、非經通之道。宜復古鄉舉里選。与太尉亮等、上疏曰、：魏氏承顛覆之運、起喪乱之後。人士流移、考詳無地。故立九品之制、粗具一時選用之本。：臣等以為、宜皆蕩除下法、一擬古制、以土斷定、自公卿以下、皆以所居為正、無復懸客遠屬異土者。：尽除中正九品之制、使举善進才、各由鄉論。云云。

とあり、新唐書^{卷一百九十九}柳沖伝に、

魏氏立九品、置中正。云云。

とある。つぎに、魏志陳羣伝の官人之法であるが、これは選挙制度といった意味の一般的表現であろう。なお、魏志^{卷九}夏侯玄伝に、

太傅司馬宣王問以時事。玄議以為、夫官才用人、国之柄也。故銓衡專于台閣、上之分也。孝行存乎閭巷、優劣任之郷人、下之敘也。云云。

とある。当時典財主計を略して典計というように、⁽³⁾ 官才用人を略して官人といったのであろう。⁽⁴⁾（魏志陳羣伝の「官人之法、羣所建也。」とあるのは、新らしい選挙制度は陳羣が建てたものである、といった意味であろう。）

太平御覽^{卷二百六十五}職官部六十三中正の項を見ると、中正などに関する数多くの史料があげられている。しかしそこには、九品、

九品之制という表現はあつても九品官人法、九品中正といった表現はない。管見の及ぶ範囲では、一語としての九品官人（の法）の初見は、年代的に唐の通典にあるものである。すなわち、通典^{卷十四}選舉二歴代制中の項に、

延康元年、吏部尚書陳羣以、天朝選用、不尽人才。乃立九品官人法。云云。

とあるのがそれである。九品中正という表現はあるいはそれよりもおくれて現われたのではないかと思われる。資治通鑑^{卷九十六}魏黃初元年（延康元年と同年。黃初は延康のつぎの年号。）の条に、

尚書陳羣以、天朝選用、不尽人才。乃立九品官人法。州郡皆置中正、以定其選。挾州郡之賢、有識鑒者、為之。區別人物、第其高下。

とあるが、その胡三省注に、

九品中正、自此始。

と見える。

いま取りあげている選舉制度を単に九品（の制）と称した際、それは官品なり郷品なりの九品（の制）と混同するおそれがある。九品中正、九品官人法という表現についていえば、その施行時における表現により近いという点では、九品中正の方をとるべきであろうが、現在のわれわれの感じからすると九品官人法の方がその選舉制度の包括的称呼としてピッタリする。以上のような点から本稿では一応九品官人法という称呼を用いることとする。

第二節 陳羣の選舉制度改革の目的

九品官人法の制定をめぐる研究にあつては、旧来通典^{卷十四}選舉二歴代制中の項に、

九品官人法の制定について 越智

魏文帝爲魏王。時三方鼎立、士流播遷。^(下)四人錯雜、詳覈無所。延康元年、吏部尚書陳羣以、天朝選用、不尽人才。乃立九品官人之法。州郡皆置中正、以定其選。挾州郡之賢、有識鑒者、爲之。區別人物、第其高下。云云。

とある記事（以下、前記事という）と、魏志^{卷二}陳羣伝に、陳羣について、

文帝在東宮、深敬器焉。待以交友之礼。常歎曰、自吾有回門人。日以親。及即王位、封羣昌武亭侯、徙爲尚書、制九品。官人之法、群所建也。及踐阼、遷尚書僕射、加侍中。云云。

とある記事（以下、後記事という）とが立論の基礎となつてゐる。しかしこの両記事は重要な点で一致しない。すなわち、前記事では陳羣が後漢王朝の吏部尚書として九品官人法を制定したことになるが、後記事では陳羣が魏王国の（人事を掌る）尚書として九品官人法を制定したことになる。結論を先にいうと、前記事のそうした記述はとるべきでなく、後記事の記載を正しいとすべきである。ここでそれを検討しよう。

前記事を見て奇異に感ずるのは、この記事に従うと、陳羣の始めた九品官人法において州にも亦中正がおかれたとしなければならぬことである。周知のように州に中正がおかれたのは、魏の嘉平のころで、九品官人法の制定時から三十年もたつてゐる。この点からいつても前記事はそのまま信じがたい。それならば前記事は一体どのように考えるべきであろうか。六朝の史料にあつては、かなりのちの時点の状態をある時点に投影して、あたかもそれがそのときの状態であるかの如く述べることがある。一例をあげると、北堂書鈔^{卷六十四}護軍將軍一〇八の項に、

晋起居注、泰始七年、詔曰、中護軍韓浩与中領軍史奐、皆掌禁兵、典武選。

とある。中護軍韓浩と中領軍史奐とが後漢末掌つていたのは後漢王朝の禁軍ではなく、曹操の「中央軍」である。（韓浩と史奐とはともに後漢末、曹操の在世中に死んでゐる。）つまり晋の泰始七年に中護軍と（中領軍の後身たる）北軍中候とが禁

兵を掌り、かつ武官の人事を掌つていたが、それが右のような形に投影されているとすべきなのである。⁽⁵⁾ 本文後述の「十二郡中正」にもそうした投影がある。そうすると、前記事の記述には自ら九品官人法の制定時よりかなりののちの状態（少なくとも州中正の制定後の状態）が投影されていることになろう。

ここで、魏志^二文帝本紀延康元年の条の注を見ると、

献帝伝載禪代衆事曰、：魏王侍中劉廙辛毗劉曄尚書令恒階尚書陳矯陳羣黃門侍郎王懿董遇等言。云云。

とある。ここで陳羣が魏王国の尚書とされていることは、前後の記載様式から見て正しいとすべきである。このことは自ら後記事の記事とも一致する。かくて陳羣が九品官人法を制定したのは魏王国の（人事を掌る）尚書としてであつたとされよう。なお、魏志^一武帝本紀建安十八年十一月の条に、

初置尚書侍中六卿。

とあり、その注に、

魏氏春秋曰、以荀攸為尚書令、涼茂為僕射、毛玠崔琰常林徐奕何夔為尚書、王粲杜襲衛觐和洽為侍中。

とある。かくて建安十八年以後曹氏の国には尚書令、尚書僕射、尚書の諸官がおかれることになつたのであるが、陳羣はそうした魏（公）国の後身たる魏王国の尚書になつたわけである。

尚書陳羣への吏部尚書の投影に類似した例として、東曹掾あるいは領選舉の魏国尚書僕射毛玠への吏部尚書の投影を取りあげてみよう。魏志^二毛玠伝を見ると、

太祖為司空丞相。玠嘗為東曹掾。与崔琰並典選舉。其所举用、皆清正之士。雖於時有盛名、而行不由本者、終莫得進。務以儉率人。由是、天下之士、莫不以廉節自励。雖貴寵之臣、輿服不敢過度。太祖嘆曰、用人如此、使天下人自治。吾復何

為也。

とある。右は東曹掾として選挙を掌つた毛玠についての記述である。ところで、通典^{卷十} 選挙二歴代制中の項の注に、

初曹公時魏府初建。以毛玠崔琰為東曹掾史、銓衡人物。選用先尚勤儉。於是、天下士人、皆砥礪名節、務從約損。云云。

とあり、通典^{卷十三} 職官五吏部尚書の項の注に、

陳羣為尚書。延康元年、始建九品官人法。擢吏部尚書。又毛玠、字孝先。為吏部尚書。無敢好衣美食。魏武嘆曰、孤之法、

不如毛尚書。

とある。さきの記事では毛玠が正確に東曹掾史とされているが、あとの記事では毛玠が事実と異つて吏部尚書とされている。(毛玠は東曹掾、あるいは曹操の国の尚書僕射として選挙を掌っているけれども吏部尚書になつたことはない。)いま太

平御覽^{卷二百十四} 職官部十二吏部尚書の項を見ると、

傳咸集表曰、昔毛玠為吏部尚書。無敢好衣美食者。魏武歎曰、孤之法、不如毛尚書。今使吏部用心、如毛玠、風俗之易、

蓋不難矣。

とある。通典の記事は必らずや太平御覽の傳咸集(表)に基くものであろう。以上瞥見したように、吏部尚書になつたことのない毛玠が、それにもかかわらず吏部尚書とされているのは、のち(西晋時代)吏部尚書が選挙を掌っていることを傳咸が後漢末に投影し、東曹掾あるいは領選挙の魏国尚書僕射たる毛玠を吏部尚書毛玠とし、通典の撰者杜佑がそれを踏襲したからと考えられるのである。

さて、前記事に天朝の語が見える。これは一般的にいうと後漢王朝(の中央政府)のことになる。この際陳羣が魏王国の人事を掌る尚書であつたことを考えると、後漢王朝の選挙が不備であるので彼が九品官人法をたてたという通典の記事は筋

が通らない。もつとも、両者を生かそうとすると、魏の受禪を目前にして、後漢王朝の反魏分子を除くべくその資格再審査を行うという目的でそれが行われた、あるいは受禪時後漢王朝の反魏分子を自動的に受け入れることがないよう、受禪時それらの一掃を可能とする選挙制度を予めつくるという目的でそれが行われた、という想像がなりたちそうである。しかし、具体的に検討するとそれらがなりたつ余地はない。まず前者の場合であるが、魏受禪の過程は魏志^{卷二}文帝本紀に詳しく述べられている。それを見ると、延康元年六月ごろから禪讓の「行事」がめだつてくるが、同年十一月の禪讓完了までの過程において、表面上後漢王朝と魏王国とはあくまで一線がひかれていたのであつて、当時魏王国の「人事官」が後漢王朝の官人を支配しその資格審査をするといつたことはとうてい考えられない。魏の受禪がながびいたのは、結局人心が完全に（後）漢王朝を去つていなかつたからと考えるべきであろうが、受禪完了までの過程において魏王国の「人事官」が後漢王朝の官人の資格審査をするということは、禪讓の「行事」を行うことと相反するわけである。⁶⁾ つぎに後者の場合であるが、この制度が受禪時後漢王朝の反魏分子を一掃するのに役立たぬとはいえない。しかし、魏時代の九品官人法の運営から考えて、それが主目的でないのは疑うべくもない。このことについてはのちに述べる。このように見てくると、天朝の語が、魏王朝が存在している時代において魏王朝（の中央政府）が後漢極末の魏王国（の「中央政府」）に投影されたところに生じたのが一段と明かになる。なお、この際後漢王朝の官人とくに有能な重臣の殆んどすべてが後漢末すでに魏王国の官人なり（それ以外の）曹氏政權の官人なりに転向していることは無視できない。そのことは、受禪過程において、後漢王朝の官人を曹氏側から改めて資格審査し、そこに無用の混乱―未だ完全に人心から忘れ去られていない（後）漢王朝の存在を人々に再認識させること、をひきおこす必要性のなかつたのを示唆する。矢野主税氏は、のちの魏王朝の官僚（陣）がすでにその建国以前に充実し、しかもそれが後漢官僚社会と一応絶縁したもので、そこに新しい才能が登用されていたことを主張してお

られるが、従うべき見解である。⁷⁾

かくて、九品官人法は魏王国の人事を掌る尚書陳羣が制定したとしなければならない。この制度制定の目的は、結局旧来曹操が認めていた選挙制度（それは後漢王朝の選挙制度でもある）を否定することにある。太平御覽^{卷二百六十五}職官部六十三中正の項に、

孫楚集奏曰、九品、漢氏本無。班固著漢書、序先往代賢智以^{九品}品。此蓋記鬼錄次第耳。而陳羣依之。以品生人。又魏武拔奇決于胸臆。収人才、不問階次。豈頼九品而後得人。今可令長守為小大中正。各自品其編戶。

にあるのは、その一端を物語るとすべきである。ところで、（後）漢時代の選挙制度には二つの大きい欠陥がある。その一は人事に関し中央集権の実がないことである。周知のように当時各官界の長官は、自らの意をもつて官人候補者なりすでに官人となつてゐるものなりをその部下に任命することができた。（その人事の中核をなすのは辟して掾属とすることである。）また、同じく自らの意をもつて官人候補者なり部下の官人なりを秀才孝廉などに察挙することもできた。また、同じく自らの意をもつてその門生を官人に推挙することもできた。中央官界で人事を掌る役所なりその長官なりは、各長官の部下に関する人事についてはこれを了承するだけである。秀才孝廉などについてはこれを試験する。（その役所に）官人たるべく推挙された門生についてもほぼそれに準じたようである。こうした状態では官人の人事権はむしろ各長官にあるとすべきであり、中央官界で人事を掌る役所なりその長官なりが、全国的視野において自己の意をもつて選挙を行うことは困難であつた。そこでは選挙を通じての中央集権は容易でない。その二は、（それにかからんで）皇帝の支配力の浸透が妨げられることである。後漢時代、「長官、師たる官人」と「部下に任命された官人、察挙された官人、官人となつた門生」との間に、選挙を通じて私的結合関係が生成し、それが往々皇帝の支配力の浸透を妨げたのは周知の通りである。曹操は旧来の選挙制度を

肯定し、その「弊害」をたくみに利用して後漢の皇帝の支配力を崩して行つた。しかし、曹操のあとをついだ曹丕の場合その受禪が目前に迫つてくると、そうした選挙制度の「弊害」はこれを除去しておくべきである。このように見てくると、九品官人法の制定が右の二つの欠陥の除去を目的とし、かつその目的に副うような機構をもつべきが自ら予想されよう。

ちなみに、晋南朝唐の史料において九品官人法が権宜の制であるとか一時の制であるとかいわれている。現在それは九品官人法がもともと漢魏交代時における一時的な選挙制度であつたのを示している、とされている。しかし、史料に即して考へると、それは後漢時代の（選挙制度の主流をなす）郷举里選の制を基準として、それから見た際九品官人法が権宜の制、一時の制であることを示している、とすべきである。以下それを検討するが、そのまゝに後漢時代の郷举里選にふれておく。

通典^{卷十} 選挙四雜議論上の項に、

（梁）武帝天監中、（沈）約又上疏曰、頃、自漢代、本無士庶之別。自非仕宦、不至京師。罷公卿牧守、並還鄉里。小人瞻仰以成風俗。且黌校棊布、伝経授受。皆学優而仕。始自郷邑、本於小吏。幹佐方至文学功曹。積以歲月、乃得察举。人才秀異、始為公府所辟。遷為牧守、入作台司。漢之得人、於斯為盛。云云。

とある。「士庶之別」は家系的世襲的に士||官人になるものとそうでないものとの区別、という意味である。この記事は各地の有為の人物が郷举里選（その具体的現われが州郡の察举である。）をへて中央官界に入つて行く過程を図式的に示している。後漢書を見ると、右のような立身の実例は数えきれないほどある。なお、吳志^{卷十} 陸遜伝を見ると、その注に、

吳書曰、（孫）權嘉（陸）遜功德。欲殊顯之。雖為上將軍列侯、猶欲歷本州举命。乃使揚州牧呂範、就辟別駕從事、举茂才。

とある。これは後漢時代、郷举里選||本州郡の察举が官達において不可欠ともいふべきであつたのを示唆しよう。以上瞥見

したところに明かなように、郷举里選は、官人_二士たるべき能力をもつもので、かついまだ官途にないものがすべて本貫に住むべきを前提とする。さて、晉書 卷三衛瓘伝に、

瓘以、魏立九品。是權時之政、非經通之道。宜復古郷举里選。与太尉亮等上疏曰、昔聖王崇賢、举善而教。用使朝廷德讓、野無邪行。誠以閭伍之政、足以相檢、詢事考言、必得其善、人知名不可虚求。故還脩其身。是以、崇賢而俗益穆、黜惡而行弥篤。斯則郷举里選者、先王之令典也。自茲以降、此法陵遲。魏氏承顛覆之運、起喪乱之後。人士流移、考詳無地。故立九品之制、粗具一時選用之本耳。其始造也。郷邑清議、不拘爵位。褒貶所加、足為勸勵。猶有郷論余風。中間漸染、遂計資定品。使天下觀望、唯以居位為貴、人弃德而忽道業、爭多少於錐刀之末。傷損風俗、其弊不細。今九域同規、大化方始。臣等以為、宜皆蕩除末法、一擬古制、以土断定、自公卿以下、皆以所居為正、無復懸客遠属異土者。如此則同郷鄰伍、皆為邑里。郡縣之宰、即以居長。尽除中正九品之制、使举善進才、各由郷論。然則下敬其上、人安其教、俗与政俱清、化与法並濟。人知善否之教不在交遊、即華競自息、各求於己矣。今除九品、則宜準古制、使朝臣共相举任。於出才之路、既博、且可以厲進賢之公心、覈在位之明闇。誠令典也。武帝善之。而卒不能改。

とあり、宋書 卷九十四恩倖伝に、

漢末喪乱、魏武創業。（三）軍中倉卒、權立九品。蓋以論人才優劣、非為世族高卑。因此相沿、遂為成法。自魏至晉、莫之能改。州郡都正、以才品人。而举世人才升降蓋寡。徒以馮籍世資、用相陵駕。都正俗士、斟酌時宜、品目少多、随事俯仰。劉毅所云、下品無高門、上品無賤族者也。歲月遷諛、斯風漸篤。云云。

とあり、通典 卷十選舉二歷代制中の注に、

按九品之制、初因後漢建安中天下興兵、衣冠士族多離於本土、欲徵源流、遽難委悉。魏氏革命、州郡俱置大小中正、各

以本処人任。云云。

とある。三者をあわせ考えつつ、衛瓏らのいわんとするところを推定すると、漢末の喪乱によつて人士が流移し、旧来のままでは郷举里選が行いにくくなつた。そこで改めて権りに九品官人法を施行した。その際中正が郷举里選の精神に則り、本貫中心に人才を挙用する選挙を行うことを標榜した。（地方長官はその管下の地に本貫をもちかつそこに住んでいるものを対象に郷举里選を行うが、地方長官としての性格上、その管下の地に本貫をもつていてもそこに住んでいないものを対象に郷举里選を行うのは無理である。中正はその管下の地に本貫をもつものであれば、それがどこに住んでいるかに関係なく、郷品、状、輩を与ええる。）しかし、九品官人法は現在郷举里選（の精神）と全く違うものになつてゐる。だから九品官人法を廃止してもとの郷举里選の制にかえるべきである。しかし現在も人士流移の状態はもとのままであるから、土断を行い以て本来の郷举里選を復活できるようにすべきである、ということになるう。

つぎに、晋書^{卷四十五} 劉毅伝に、

毅以、魏立九品、權時之制。未見得人而有八損。乃上疏曰、：昔在前聖之世、欲敦風俗、鎮靜百姓、隆郷党之義、崇六親之行、礼教庠序以相率。賢不肖、於是見矣。然郷老書其善、以獻天子。司馬論其能、以官於職。有司考績、以明黜陟。故天下之人退而脩本、州党有德義、朝廷有公正。浮華邪佞、無所容厝。今一國之士、多者千數。或流徙異邦、或取給殊方。面猶不識。況尽其才力。而中正知与不知、其当品状、来嘗於台府、納毀於流言。任己則有不識之蔽。聴受則有彼此之偏。所知者、以愛憎奪其平、所不知者、以人事乱其度。既無郷老紀行之誉、又非朝廷考績之課。遂使進官之人、棄近求遠、背本逐末。位以求成、不由行立。品不校功、党誉虚妄。損政五也。：愚臣以為、宜罷中正、除九品、棄魏氏之弊法、立一代之美制。疏奏。優詔答之。

とある。⁽⁹⁾劉毅はかつての郷議里選の制を再び採用すべき美制とし、九品官人法を廢棄すべき弊法としているが、上疏の内容から逆に考えて「魏立九品、權時之制。」とあるのは、魏が九品官人法を制定したけれども、郷議里選を基準とした際、それは（やがて廢棄されるべき）暫時の制度である、といった意味とすべきであらう。なお、劉毅伝に右に続いて、

後司空衛瓘等亦共表、宜省九品、復古郷議里選。帝竟不施行。

とあるが、これがさきにあげた衛瓘伝の記事と同一内容のものであるというまでもない。つまり郷議里選も郷議里選も同一内容なのである。

つぎに、晋書^{卷四十六}李重伝に、

（李重）上疏、陳九品曰、先王議制、以時因革。因革之理、維變所適。九品始於喪亂軍中之政。誠非經国不刊之法也。且其權防軋碎、徵刑失衷。故朝野之論僉謂、驅動風俗、為弊已甚。而至於議改、又以為疑。臣以、革法創制、当先尽開塞利害之理。举而錯之、使体例大通而無否滯、亦未易故也。…漢革其弊、斟酌周秦、並建侯守。亦使分土有定。而牧司必各举賢貢士。任之郷議。事合聖典、比蹤三代。方今聖德之隆、光被四表。兆庶顯顯、欣覩太平。然承魏氏彫弊之跡、人物播越、仕無常朝、人無完处。郎吏蓄於軍府、豪右聚於都邑。事体騷錯、与古不同。謂、九品既除、宜先開移徙、聽相并就。且明貢举之法、不濫於境外。則冠帶之倫、将不分而自均。即土断之实行矣。…以為、選例九等、当今之要、所宜施用也。云云。

とある。「除」は除任の意味である。⁽¹⁰⁾「宜先開移徙、聽相并就。且明貢举之法、不濫於境外。」とあるものの本旨は、人々が移住した際その現住地を改めて本貫となし、その本貫を基準として貢举を行うべきである、といったところにある。李重のこの「陳九品」は、九品官人法を喪亂軍中の政に始まった、經国不刊の法ではないものとしながらも、もはやそれを否定で

きぬ存在と考え、その考えを前提としてできるかぎりそれをかつての郷举里選に一致させようとし、そこに現住地を本貫とすることなどを論じたものである。

旧来、九品官人法の制定が権宜のものであるとされる場合、依拠する史料は主として右にあげた晋書衛瓘伝、宋書恩倖伝、晋書劉毅伝、晋書李重伝の四記事である。右に瞥見したところに明かなように、それらは九品官人法なりその制定なりをかりのものとしているが、それは九品官人法を郷举里選という基準からみてのことであつて、九品官人法を魏の受禪が終ると廃止すべき一時的なものであつたとしてのことではない。

なお、(後)漢時代の選挙制度は郷举里選をその精神としていたにしても、現実の運営にあたつては郷举里選による方法以外に、門生となることによつて官人となる方法を認めていた。それについては別稿でふれる。

ここで現住地、現任地のいかんを問うことなく、本貫の中正が郷品などを与えたことを物語る一例をあげると、晋書劉毅伝に見える劉毅の上疏のなかで、前引のように、

今一国之士、多者千数。或流徙異邦、或取給殊方。面猶不識。況尽其才力。而中正知与不知、其当品状、采誉於台府、納毀於流言。云云。

とある。「品状」は、中正の与える郷品と状とを指す。（註）

第三節 後漢王朝の選挙制度

曹操は後漢王朝の選挙制度による選挙を行つている。この選挙制度が九品官人法の施行によつて否定されるのであるが、そうした意味で九品官人法の研究には後漢王朝なり曹操なりの選挙制度の解明が要求される。本節では必要な最小限度にお

いて後漢王朝と曹操との選舉制度を瞥見する。

旧来、後漢時代における郷举里選に則る選舉に關して、辟召制（あるいは辟命制）、故吏などが大きく取りあげられている。その際、「（任命權をもつ）長官がその意を以て自らの掾、属に辟したもの（＝辟吏）がその長官の故吏となる」という理解が示されている。この理解は、故吏と称される場合、もはやその長官との間に公的な長官部下の關係がきれている、ということを加した際正確なものとなる。すなわち、かつて長官によつてその掾、属に辟されたもので、しかも（問題となる時点に）そのものとの間に公的な長官部下の關係がきれているものが故吏なのである。しかし当時の故吏の語の用法はそれに限定されない。長官によつて察举されたものを故吏ということもあり、退官した官人を故吏ということもある。⁽¹³⁾

長官によつて辟吏に任命されたもので、しかも（問題となる時点に）そのものとの間に公的な長官部下の關係がきれている故吏（以下、第一の故吏という）と長官によつて察举された故吏（以下、第二の故吏という）は、旧長官（当時の用語に従つてそれを旧君という）に対し、支配服従關係につらなる私的情誼關係をもつものと理解されていた。もちろんその關係は強く表面にあらわれることのある反面、殆んど消えてしまつていゝこともある。また、その關係は直接長官と部下との關係にあるものの「公的」な關係に及ばない。魏志^{卷六}劉表伝の注に、後漢末のこととして、

傳子曰、初（劉）表謂（其從事中郎韓）嵩曰、今天天下大乱、未知所定。曹公擁天子、都許。君、為我觀其鸞。嵩對曰、聖達節、次守節。嵩守節者也。夫事君為臣、君臣名定、以死守之。今策名委質。唯將軍所命、雖赴湯蹈火、死無辭也。：使嵩、可也。設計未定、嵩使京師、天子假嵩一官、則天子之臣。而將軍故吏耳。在君為君。則嵩守天子之命。義不得復為將軍死也。唯將軍重思、無負嵩。表遂使之。果如所言。天子拜嵩侍中。遷零陵太守。還、称朝廷曹公之德也。表以為、懷貳。大会寮属数百人、陳兵見嵩。盛怒、持節、將斬之。數曰、韓嵩、敢懷貳邪。衆皆恐、欲令嵩謝。嵩不動。謂表曰、將軍負

嵩。嵩不負將軍。具陳前言。表怒不已。云云。

とある。郡の太守は天子の直接任命にかかる。ここに見える旧君、故吏關係と現君、現吏關係との強弱は、普遍的妥当性をもつものである。¹⁴また晋書^{卷八}張軌伝を見ると、

（前略）張掖人吳詠為護羌校尉馬賢所辟。後為太尉龐參掾。參賢相誣。罪宐死。各引詠為証。詠計、理無兩直。遂自刎而死。參賢慙悔、自相和釈。（涼州刺史張）軌、皆祭其墓、而旌其子孫。

とある。馬賢、龐參がそれぞれ護羌校尉、太尉として活躍したのは後漢時代のことである。旧君、故吏關係が現君、現吏關係に対してもつ強さは、それに普遍的妥当性をもたせた際せいぜい右に示されている程度に止まるべきである。しかし、ここで重要なのは、そうした私的情誼關係が一応公的に認められたことと、それが旧君の潜在勢力となりえたこととである。ま

ず私的情誼關係が一応公的に認められたことについてであるが、後漢書^{卷十三}鄭弘伝に、鄭弘について、
元和元年、代鄧彪為太尉。時挙将第五倫為司空。班次在下。每正朔朝見、弘曲躬而自卑。帝問知其故。遂聽置雲母屏風、
分隔其間。由此、以為故事。

とある。また、後漢書^{卷十四}胡広伝に、胡広について、

凡一履司空、再作司徒、三登太尉。又為太傅。其所辟命、皆天下名士。与故吏陳蕃李咸、並為三司。蕃等每朝会、輒称疾
避広。時人榮之。

とあり、その注に、

謝承書曰、咸、字元卓。汝南西平人。…三府並辟。司徒胡広挙茂才。除高密令。

とある。李咸は司徒胡広の府に辟され、ついで司徒胡広から茂才に挙げられたのであろう。つまり李咸は胡広の第一の故吏

であると同時に第二の故吏でもあつたと考えられるのである。（陳蕃と胡広との関係は定かでないが、胡広伝の本文から一応第一の故吏と推定される。）陳蕃らが三司になつたのは元和元年よりはるかのものであるから、胡広伝の本文に見える胡広とその故吏陳蕃、李咸との関係は、鄭弘伝の記事とあわせ考え、旧君と故吏との私的情誼関係が一応公的に認められたところに生じたものと考えてよからう。つぎに故吏が旧君の潜在勢力となりえたことについてであるが、魏志卷六袁紹伝に、後漢末袁紹が董卓と議が合わず冀州に出奔したとき、侍中周滂らが陰かに袁紹のために董卓に説いた言をのせている。そのなかに、

袁氏樹恩四世、門生故吏徧於天下。若收豪傑、以聚徒衆、英雄因之而起、則山東非公之有也。不如、赦之、拜一郡守。則紹喜於免罪、必無患矣。

とあり、ついで、

卓以為、然。乃拜紹勃海太守、封鄆鄉侯。

とある。ここで袁紹が故吏に対しても潜在勢力が露呈された一例をあげると、袁紹伝に、

（前略）（冀州牧韓）馥長史耿武別駕閔純治中李歷、諫馥曰、冀州雖鄙、帶甲百万、穀支十年。袁紹孤客窮軍、仰我鼻息。譬如嬰兒在股掌之上。絕其哺乳、立可餓殺。奈何乃欲以州与之。馥曰、吾袁氏故吏。且才不如本初（袁紹の字）。度德而讓、古人所貴。諸君独何病焉。從事趙浮程璜、請以兵拒之。馥又不聽、乃讓紹とある。

後漢時代、旧君と第一、第二の故吏との私的情誼関係が一応公的に認められていたこと、それが旧君の潜在勢力をなすことを別の面で補強するものとして、旧君が誅されたとき、第一、第二の故吏が（直接旧君が誅された事件に関係なくて

も）自動的に免官されたことがあげられる。以下それを検討しよう。後漢書^{十六} 陳蕃伝に、陳蕃が誅殺されたときのこととして、

徙其家屬於比景。宗族門生故吏皆斥免禁錮。

とあり、後漢書^{十七} 劉淑伝に、党錮の禍に際してのこととして、

於是、又詔州郡、更考党人門生故吏父子兄弟、其在位者免官禁錮、爰及五屬。…党錮自從祖以下、皆得解釈。

とあり、後漢書^{十七} 李膺伝に、李膺が誅されたときのこととして、

門生故吏及其父兄並被禁錮。

とある。この際注目すべきは右の陳蕃伝、劉淑伝、李膺伝に現在の部下たる現吏を示すものが見えていないことである。ま

た、後漢書^{十四} 梁冀伝に、

順帝乃拜冀為大將軍。…建和元年、益封冀萬三千戶。增大將軍府掾高第茂才、官屬倍於三公。

とあり、その誅されるや、

（前略）故吏賓客、免黜者三百余人。朝廷為空。唯尹勲袁盱及廷尉邯鄲義在焉。

とある。（尹勲については、後漢書^{十七} 尹勲伝に、「及桓帝誅大將軍梁冀、（尚書令尹）勲參建大謀。封都鄉侯。」とある。

袁盱は当時光祿勲で冀の大將軍の印綬を収めたものである。）梁冀伝の注に、

漢官儀、三公府有長史一人。司徒府掾屬三十一人、令史及御屬三十六人也。

とあるが、大將軍梁冀府には、梁冀が誅されたとき掾屬その他多数の現吏がいた筈である。それにもかかわらず現吏のことが少しも出てこない。そうすると、右の劉淑伝、李膺伝、梁冀伝の記事から逆に現吏としての辟吏をも故吏といえそうであ

る。つまり、故吏は辟吏そのものと第二の故吏とを指すといえそうである。しかし管見の及ぶ限りでは現吏たる辟吏を故吏とはいっていない。辟吏が（ある人の）故吏と称されるのは、常に公的な長官部下の關係がきれているときである。例えば、後漢書^{十卷四}周景伝に、周景について、

辟大將軍梁冀府。…景後徵、入為將作大匠。及梁冀誅、景以故吏、免官禁錮。朝廷以景素著忠正、頃之、復引拜尚書令。

とあり、後漢書^{十卷六}張奐伝に、張奐について、

後辟大將軍梁冀府。…永寿元年、遷安定屬國都尉。…明年、梁冀被誅。奐以故吏、免官禁錮。…在家四歲、復拜武威太

守。

とあり、後漢書^{十卷七}羊陟伝に、羊陟について、

舉孝廉。辟太尉李固府。舉高第。拜侍御史、会固被誅。陟以故吏、禁錮歷年。復舉高第、再選冀州刺史。

とあり、後漢書^{十卷五}陳禪伝に、陳禪について、

車騎將軍鄧騭聞其名而辟焉。舉茂才。…及鄧騭誅廢、禪以故吏免。復為車騎將軍閭顯長史。

とあり、後漢書^{十卷五}崔寔伝に、崔寔について、

遷大將軍（梁）冀司馬。…以病徵、拜議郎。…会梁冀誅。寔以故吏、免官禁錮數年。時鮮卑數犯邊。詔王公、舉威武謀略

之士、司空黃瓊薦寔。拜遼東太守。

とある。また前引の劉表伝の注は辟吏が（ある人の）故吏と称されるのが、公的な長官、部下の關係がきれてからであることを証明する。そうすると、現君と現吏（いま取りあげている現吏は将来第一の故吏となるべきものに限定する）との關係は現君が誅されて死亡した時点（あるいは免黜をうけた時点）において終了し、同時にその時点において旧君と故吏との關係

になると考えざるをえない。つまり、いま問題としている陳蕃伝、劉淑伝、李膺伝、梁冀伝の故吏は現君死亡時（あるいは免黜時）において、それまで現吏であつたものと第一、第二の故吏とをあわせ指していると解すべきなのである。

なお、後漢書^{卷十六} 陳蕃伝に、

（前略）蕃因上疏極諫、曰、…帝諱其言切、託蕃辟召非其人、遂策免之。

とあり、後漢書^{卷十四} 胡広伝に、胡広について、

出為濟陰太守。以举吏不実、免。

とある。これらは長官が辟吏の選挙と察举とに大きい責任をもたされていたのを物語るとすべきである。ところで、魏志^{卷十} 鐘繇伝を見ると、後漢末、建安二十四年に魏の相国鐘繇がその辟した相国の府の西曹掾魏諷が反したため免官されている。

これは長官が辟吏に対し、その就官時だけでなく、のちのちまでも責任を負うべきを物語るとされよう。この免官は、結局曹操が、長官が辟吏の将来に責任をもつべきものとしていたのを示唆しよう。

前節及び本節でいままで考察したことは、（後）漢時代の選挙において人事権をもつ長官と官人たるべきものとの間に私的結合関係が生ずる可能性が十分にあつたのを証するであらう。¹⁵

曹操は旧来の選挙制度を肯定しつつその勢力を拡大強化している。ただし戦乱期のことだけに彼は有能な人物を他官界に故吏として送りこむようなことはあまりしていない。¹⁶ また彼は門生を盛んに養成し、それを自己の部下の官人とするといったことも殆んどしていないようである。蓋し彼にとつてそのような手間のかかることをする必要はないのであつて、必要な人物は直接部下の官人とすればよかつたのである。つまり彼の勢力をささえる官人は事実上その部下たる官人だけといった様態が強化されているのである。なお、五井直弘氏は曹操政権の人的構成が、曹操の司空、丞相時代その掾属に辟したもの

(つまり辟吏)を中核としたのを明かにしておられる。⁽¹⁷⁾ところで、すでに別の論考で述べたように、曹操政權は臣従者と客従者から構成されていた。つまり曹操の部下の官人にはその臣でないものもいたのである。⁽¹⁸⁾しかしこうした辟吏層は当然のこととして曹操に臣従していたと考えられる。すなわち、魏志^{卷十}郭嘉伝の注に、

傳子曰、河北既平。太祖多辟召青冀幽并知名之士、漸臣事之、以為省事掾屬。云云。

とある。また、魏志^{卷十}何夔伝に、何夔について

太祖辟為司空掾屬。…太祖性嚴。掾屬公事往往加杖。夔常畜毒藥、誓死無辱。是以、終不見及。

とあるが、曹操が官人たる客従者に杖を加えることは殆んど考えられない。

ところで、旧来の選挙制度は一面で曹操に有利であるが、他面彼にとつて必ずしも好ましくない状態を生ずることもある。すなわち、曹操の部下の官人には、彼以外の辟吏であつたものもあれば、かつて彼以外から察掾されたものもある。⁽¹⁹⁾彼が辟召制を通じてその君臣關係を強化しようとする限り、その部下が、かつて自らを辟した旧君に私的情誼をもつことを否定するのは無理である。ところで、魏志^{卷十三}常林伝の注に、吉茂について、

初茂同産兄黃、以(建安)十二年中、從公府掾為長陵令。是時、科禁長吏擅去官。而黃聞司徒趙溫薨。自以為故吏。違科奔喪。為司隸鐘繇所収。遂伏法。

とある。司隸校尉鐘繇は曹操の腹心である。右の「長吏」は県の令長という限定された意味でなく、広く各官界の長官を指すすべきであろう。また「科」は漢の科であろう。右は各官界の長官が擅に官を去るのを禁止した科を適用して、第一の故吏が旧君の喪に奔つたのを処罰した事例であるが、魏志^{卷十}刑顥伝に、

刑顥、字子昂。河間鄭人也。举孝廉、司徒辟、皆不就。…太祖辟鄭、為冀州從事。時人称之曰、德行堂堂刑子昂^(刑顥の字)。除

広宗長。以故將喪棄官。有司舉正。太祖曰、顯篤於旧君。有一致之節、勿問也。（故將は察舉した太守を指す。）

とあり、魏志^{卷十} 王脩伝の注の傳子に、

太祖既誅袁譚、梟其首。令曰、敢哭之者、戮及妻子。於是、王叔治田子泰相謂曰、生受辟命、亡而不哭、非義也。畏死忘義、何以立世。遂造其首、而哭之。哀動三軍。軍正白行其戮。太祖曰、義士也。赦之。

とあり、魏志^{卷十} 田疇伝に、

遼東斬送袁尚首。令三軍、敢有哭之者斬。疇以嘗為尚辟、乃往弔祭。太祖亦不問。

とある。⁽²⁰⁾ こうしたことは、曹操が辟召制、（察舉制）を認める限り不可避免的に生ずるものであつたとされよう。なお、魏志^{卷十} 袁渙伝を見ると、蜀の劉備の第二の故吏に關し、

時有伝劉備死者。羣臣皆賀。渙以嘗為備掾吏、独不賀。

とある。当時袁渙は曹操のもとにあつた。これは彼がかつて予州刺史劉備から茂才にあげられたために生じたものである。⁽²¹⁾

以上瞥見した様態はつぎの見解をうみ出すであろう。曹氏が後漢の皇帝の臣として後漢政權に「寄生」しながらしかもそれを喰いたおして行く際、旧来の選舉制度はむしろ必要であり、大いに利用すべきものであつた。しかし、旧来の選舉制度は不可避免的にそこに私的結合關係を生じ、皇帝の支配力をたちきる危険性を内包する。従つて曹氏が受禪して皇帝となるにあつては、その危険性を排除すべき新選舉法を新たににつくり出す必要性がある。⁽²²⁾

第四節 九品官人法の実施状態とその成果（一）

本節では九品官人法の実施状態とその成果を、中央の人事を掌る役所なりその長官なりが百官の人事權を掌握したという

点から考察する。

魏志^{卷十三}常林伝の注に、

時國家始制九品。各使諸郡撰置中正、差敍自公卿以下至于郎吏功德材行所任。

とある。これは、諸郡の太守にそれぞれの郡出身で中正の任にたえるものを予め撰ばせ、それを中央から改めて差敍したが、その対象となつたのが公卿以下郎までの官人になつてゐるものであつたのを物語つてゐる。⁽²³⁾ところで、陳羣が九品官人法を制定したのは曹丕の受禪直前であるから、魏王国内を対象にした九品官人法の最初の実施は、殆んど断絶を示すことなく全国を対象とする九品官人法の最初の実施に連続する。これは陳羣が九品官人法を制定するときに予定してゐたところでもあるろう。かくて生じた九品官人法では、吏部尚書が機能上、右のような中正の上位にあつた。(その考察は別稿で行う。)なお、(魏建國後)郡(の長官)が中正を予め撰んだ一例をあげると、右の注に、

(王)嘉時還為散騎郎。馮翊郡移嘉為中正。云云。

とある。(馮翊郡は魏王國に含まれていない。)ただし、晉書^{卷九十四}任旭伝に、任旭について、

察孝廉、除郎中。州郡仍举郡中正。

とある。これは西晉時代のことである。ここに州(の長官)が郡(の長官)とならんで出てきているが、恐らく郡中正を撰することは最初専ら郡の長官||太守によつて、のち州郡の長官||刺史・太守によつて行われたのであらう。

さて、太平御覽^{卷一百二十四}職官部十二吏部尚書の項に、

晉陽秋曰、陳群為吏部尚書、制九格登用。皆由於中正。考之簿世、然後授任。

とあり、また、

袁子曰、魏家置吏部尚書、專選天下百官。夫用人、人君所司、不可以假人者也。使治乱之柄制、在一人之手、權重而人才難。居此職、称此才者、未有一也。

とある。前者の「考之簿世、然後授任。」とあるのについては第五節でふれる。右の両記事はあいまって、九品官人法が実施される（後）漢時代のように各長官が選舉權をもつという状態が一変し、中央で人事を掌る役所なりその長官なり―魏成立以後でいえば尚書省の吏部曹なり吏部尚書なり―が百官の人事權を掌握するようになったのを物語るであろう。

ところで、九品官人法下にあつても、特定の長官が辟召を専らにするをえるという制度があつた。晋書^{卷三十四}羊祜伝に、羊祜について、

（晋）咸寧初、除征南大將軍。開府儀同三司、得專辟召。：祜開府累年、謙讓不辟士。始有所命。會卒。不得除署。故參佐劉儉趙寅劉弥孫勃等、賤詣（杜）預曰、：（羊祜）既有三司儀。復加大將軍之号。雖居其位、不行其制。始辟四掾、未至而隕。夫挙賢報國、台輔之遠任也。搜揚側陋、亦台輔之宿心也。中道而廢、亦台輔之私恨也。履謙積稔、晚節不遂。此遠近所以為之感痛者也。：況生存所辟之士、便当随例放棄者乎。乞蒙列上、得依已至掾屬。

とある。右の記事は羊祜が征南大將軍に除されたとき、（開府の）三司^{卷九}三公の府と同じく自ら掾屬を辟しえたのを示している。六朝時代、（開府の）三司^{卷九}三公などは往々そうしたことをなしている。例えば、宋書^{卷十三}王素伝に、

大明中、太宰江夏王義恭開府辟召。辟素為倉曹屬。（不就。）

とあり、宋書^{卷十六}江夏文獻王義恭伝に、太宰領司徒であつた江夏王義恭について、

（大明）六年、解司徒府。太宰府依旧辟召。

とあるが、右の王素伝の「開府辟召」は、江夏王義恭が太宰として開府したため自ら掾屬を辟しえることになつたので、王

素を属に辟したとすべきである。(據が正で属は副であるが、ここで取りあげている限りではそれらは同質としてよい。)また、宋書^{卷九}宗炳伝に、宗炳らについて、

高祖^(劉裕を指す)開府辟召。下書曰、…可下辟召、以礼屈之。於是、並辟太尉掾。皆不起。

とあり、宋書^{卷二}武帝本紀中義熙十二年正月の条に、

詔公^(太尉劉裕を指す)、依旧辟士。

とあるが、右の「開府辟召」は、劉裕が太尉として開府したため自ら掾属を辟しえることになつたので、宗炳らを掾に辟したのを物語るとすべきである。また、宋書^{卷十}順帝本紀昇明三年正月の条に、

丁巳、詔、太傅府、依旧辟召。

とあり、梁書^{卷一}武帝本紀上中興二年正月の条に、

詔、進高祖^(當時大司馬)都督中外諸軍事。…置左右長史司馬從事中郎掾属各四人。兹依旧辟士。余並如故。

とあるが、この「依旧辟士」も亦右のような辟吏任命のことに違いない。しかしそうした辟にあつても、長官の人事権行使は決して旧のように無限定的でなく、一つの枠内におけるものであつたと考えられる。すなわち、晋書^{卷七}諸葛恢伝に、東晋時代における諸葛恢について、

遷左民尚書武陵王師吏部尚書。累遷尚書右僕射。加散騎常侍銀青光祿大夫領選本州大中正。尚書令。常侍吏部如故。とある。また通典^{卷十三}職官十四總論州佐の項の注に、

又晋起居注曰、僕射諸葛恢啓称、州都大中正、為^{オイ}吏部尚書及郎司徒左長史掾属、皆為中正。臣今領吏部。請解大中正。以為都中正職局司理。不宜兼也。

とある。「州都大中正、為吏部尚書及郎司徒左長史掾屬、皆為中正。」とあるのは、州中正が、(もし彼らがその州内に本貫をもつておれば)同じく人事を掌る吏部尚書、吏部郎、司徒左長史、司徒掾屬に対しても中正としての機能を發揮し、彼らに対し郷品、狀、輩を与える、といった意味であらう。司徒はいま取りあげている三司_三三公の一つである。議論の性格上、他の三司_三三公の掾屬のことは見えていないが、右を推すと九品官人法下、三司_三三公が自主的に辟吏を任命できるといつても、やはり中正から与えられた郷品(、狀、輩)がそれに適するもののなかでしか辟吏任用を行ひえなかつたとされよう。(その郷品は具體的には、一、二、三品程度である)そうすると三司_三三公の辟吏任用にあつても、(後)漢時代のように三司_三三公が完全に自己の意を以てこれを行うことは不可能となつたとすべきである。吏部が中正を「把握」している限り、それは結局、吏部が間接的とはいへ一応三司_三三公の辟召權行使を(一定の範圍に入れるべく)掣肘しえたということになるう。

つぎに、察挙の制であるが、九品官人法下にもそれは残つてゐる。ところで、卷十通典_六選舉四雜議論上の項に、

(梁)武帝天監中、(沈)約又上疏曰、…秀才自別是一種任官。非若漢代取人之例也。假使秀才對五問可稱、孝廉答一策能過、此乃彫蟲小道、非閑理功得失。以此求才、徒虛語耳。

とあるが、人々が秀才孝廉などに察挙される際、そのものものもつ郷品、狀、輩は、原則として問題にならない。しかし、対策に合格しその成績に応じた郷品を与えられて以後、そのものの官序は吏部に掌握される。ただし、その察挙制は九品官人法と相反する一面をもつ。従つてその盛行は望むべくもなかつた。卷三なお文献通考_{十六}選舉考九舉官の項に、

按自魏晉以來、州郡無上計之事。公府無辟召之舉。士之入仕者、始則中正別其賢否。次則吏部司其升沈而已。所以尚書之權最重、而其於人恩怨亦深。云云。

とある。魏晉以来、州郡の察舉、公府の辟召という形式自体がなくなつていないのは明かである。そうすると、右は九品官人法下に漢時代のような辟召がなくなつたことを簡潔に示しているとされるかも知れない。（魏以後の新らしい辟召制が、九品官人法とあくまで相容れぬ面をもつことはない。）

第五節 九品官人法の実施状態とその成果（二）

本節は、旧来選舉を通じて官界に私的結合關係がもちこまれていたが、それを否定する新選舉法として、九品官人法がどのようになつたかを、辟吏を中心として取りあげる。

まず郷品、狀、輩の性格を瞥見しよう。起家にあたり、中正の与える郷品と就くべき官の官品との間に関連があり、郷品の数に四を加えたものが起家の官品となること（例えば、郷品一品なら起家は第五品官）は、すでに宮崎市定氏の明かにされたところである。もつともこれは原則であつて、現実の起家の官品がその郷品に対応する起家の官品と一、二品程度ズレることがあつた。⁽²⁷⁾ つぎに狀であるが、魏志^{卷十二}常林伝の注に、

馮翊郡移（王）嘉為中正。嘉敍（吉）茂、雖在上第、而狀甚下。云、德優能少。

とある。「上第」は上品すなわち郷品一品あるいは二品のことであろう。また晋書^{卷五十六}孫楚伝に、

初楚与同郡王濟、友善。濟為本州大中正。訪問銓邑人品狀。至楚。濟曰、此人非卿所能目。吾自為之。乃狀楚曰、天才英博、亮拔不群。

とある。この二例から狀の具体的内容がわかるが、こうした狀は、吏部が（さきに中正に定めさせた郷品の範囲内で）どの官職に就けるかを決定する際大きい役割をはたしたようである。魏書^{卷十六}崔亮伝に、崔亮がその外甥司空諮議劉景安に答え

た書をのせているが、そのなかに、

昔有中正。品其才第、上之尚書。尚書掾狀量人、授職。此乃与天下羣賢、共爵人也。云云。

とある。そこに見える「昔」は前後関係から魏西晋を指すことが知られる。この記事は状のもつ重要性をよく示している。

また、晋書^{卷四十五}劉毅伝に見える劉毅の上疏中に、

今品不狀才能之所宜。而以九等為例。以品取人、或非才能之所長。以狀取人、則為本品之所限。若狀得其實、猶品狀相妨、繫繫選舉、使不得精於才宜。況今九品、所疎則削其長、所親則飾其短。徒結白論、以為虛譽。則品不料能。百揆何以得理。万機何以得脩。

とある。劉毅の上疏は九品官人法の欠点を列挙したものであるが、右の状、(郷)品が相妨げるといふのは事実には相違ない。

しかし、そのことは同時に中正の与える状が九品官人法において郷品におとらぬ重要性をもつたことを示唆しよう。つぎに輩であるが、太平御覽^{卷二百六十五}職官部六十三中正の項に、

傳子曰、魏司空陳群始立九品之制。郡置中正、詳次人材之高下、各為輩目。云云。

とあり、晋書^{卷十四}鄭默伝に、

初、(西晋武)帝、以貴公子、当品郷里、莫敢与為輩。求之州内。於是、十二郡中正、僉共舉默。…及武帝出祠南郊、詔使默驂乘。因謂默曰、卿知何以得驂乘乎。昔州里舉卿相輩。常愧有清談。云云。

とある。かくて輩は吏部が中正に官人候補者について彼とほぼ相似た才能をもつ人物をならべさせたもので、吏部が(さき)に中正に定めさせた郷品の範囲内(どの官職に就けるかを決定する際、状とならんで大きい役割をはたしたと考えられる。)

官人候補者はまず中正から郷品、状、輩を与えられ、ついで吏部からその郷品に応じた官品をもつ官職の範囲内で、かつ

状、輩とズレることのない官職を与えられる。彼はその官職に就いた際、始めてその長官と長官部下の關係に入るのである。そこでは彼がその長官に対し、旧來の選舉制度下、官人が自己を掾属に任用してくれた長官あるいは自己を察舉してくれた長官にもつような私的情誼をもつことはありえない。（これはあくまで官人となるまでの過程における私的結合、私的情誼のことであつて、一旦長官と部下との關係に入つて以後のこととは一応無關係である。）

なお、文選^{卷四十六}任彦昇の王文憲集序のうちに見える李善注に、

晉諸公讚曰、傳宣定九品未訖、劉疇代之。悉改宣法。於是、人人望品、求者奔競。

とある。これは恐らく西晉時代のことであろうが、そこに前任の中正の定めた郷品を後任の中正が自主的に根本的に改変しえたことが物語られている。また晉書^{卷四十五}劉毅伝に見える劉毅の上疏中に、

今之中正、不精才実、務依党利。不均称尺、務随愛憎。所欲与者、獲虚以成誉。所欲下者、吹毛以求疵。高下逐強弱、是非由愛憎。随世興衰、不顧才実。衰則削下、興則扶上。一人之身、旬日異状。或以貨賂自通、或以計協登進。附託者必達、守道者困悴。無報於身、必見割奪、有私於已、必得其欲。

とある。「割奪」は郷品を引き下げたり奪つたりすることである。これは西晉時代における九品官人法の弊害を論じたものの一部であるから弊害が誇張されているであろうが、それにしても、これから中正が一旦定めた郷品と状との改訂を自主的に容易に行いえたことが知られよう。これは輩に関しても必ずや同様であつたであろう。なお、中正が誅死したとき、その中正から郷品等を下されたものが免官となつた事例は見当らず、逆に中正からその郷品等を下されたものが惡逆をなしても、その中正が免官されたこともない。（こうした様態と表裏一体をなすものとして）中正と郷品等を与えられたものとの間に一般的事象として私的結合關係は生じていない。（郷品、状、輩が存在しないと仮定したときに比して、吏部尚書がそ

の選任者と私的結合関係をもつことの少なかつたのは疑うべくもない。

以上考察したところから、九品官人法が官人の候補者が官人となる過程において、「責任者」を漠然とさせ、以て選挙を通じて官界に私的結合関係をもちこむのを否定しようとしたことが察せられよう。ちなみに、通典卷十四選挙二歴代制中に、晋依魏氏九品之制。内官吏部尚書司徒左長史。外官州有大中正。郡国有（大）小中正。皆掌選舉。若吏部選用、必下中正、徵其人居及父祖官名。

とあるが、吏部が選用を行う際本人の「資格」以外に父祖の官歴が取りあげられている。第四節で、吏部の選挙が簿世を考えて授任するものであるという史料を引いたが、それはこうしたことを指している。これは魏初以来存していたことであろう。そこでは、九品官人法が族を対象とせず、せいぜい直系親を問題とするにすぎなかつたことが示されている。ただし、その直系親の官名を参照する程度は魏初と魏中期以後とで大きく相異したと考えられる。魏初それが全く副次的なものであつたのは、いままでの論述によつて自ら明かであろう。⁽²⁹⁾

論を進め、一旦部下となつてしまつてからの官人と長官の關係を取りあげよう。魏時代旧君の誅死につれて故吏が免官されたのは曹爽が誅されたときだけである。晋書卷三十五裴秀伝に、裴秀について、

爽乃辟為掾。…遷黃門侍郎。爽誅、以故吏免。頃之、為廷尉正。

とあり、晋書卷三十九王沈伝に、王沈について、

大將軍曹爽辟為掾。累遷中書黃門侍郎。及爽誅、以故吏免。後起為治書侍御史。

とあり、晋書卷十四盧欽伝に、盧欽について、

魏大將軍曹爽辟為掾。…除尚書郎。爽誅、免官。

九品官人法の制定について 越智

とあるのがそれである。ただし、晋書^{卷三十九}荀勗伝に、荀勗について、

辟大將軍曹爽掾。遷中書通事郎。爽誅。門生故吏無敢往者。勗独臨赴。衆乃從之。至安陽令。

とある。この記事では第一の故吏荀勗の免官の記述がないが、荀勗も亦免官されたが、その記述が脱落しているとすべきであらう。ところで、魏志^{卷二十七}王基伝に、王基について、

大將軍曹爽請為從事中郎。出為安豐太守。…爽伏誅。基嘗為官属。随例罷。

とあり、晋書^{卷十三}鄭冲伝に、鄭冲について、

大將軍曹爽引為從事中郎。輒散騎常侍光祿勳。嘉平三年拜司空。

とあり、晋書^{卷四十二}王渾伝に、王渾について、

辟大將軍曹爽掾。爽誅、随例免。起為懷令。

とある。王基伝の記事はかつて曹爽の官属であつたものが（辟吏以外にあつても）すべて免官されたのを示している。そうすると鄭冲も亦免官されたがその記述が脱落しているとすべきであらう（補1）。以上の考察は、曹爽が誅死したときその現吏であつたもの（及びもし彼が察挙したことがあれば第二の故吏）も亦免官されたのを察せしめるに足らう。魏晋南朝を通じて、右は故吏免官の唯一の例で、以後そうしたことは存しない。いまそうした免官の生じた理由を検討しよう。晋書^{卷四十六}劉頌伝に見える劉頌の上疏のなかに、

自嘉平之初、晋祚始基、逮于咸熙之末、其間累年雖鈇鉞屢斷、翦除凶醜、然其存者、咸蒙遭時之恩、不軌於法。

とあるが、晋の司馬氏の覇業は、司馬氏が嘉平元年、一応魏王朝を代表する曹爽をたおしたところにその第一歩をおく。恐らく司馬氏はかつて曹爽の吏（察挙の吏を含む）となつたものに対し、いわば自己の新權勢を再確認させる意味で、あえて

後漢時代の古例を引き出し、以てその免官を行つたのであろう。九品官人法は辟吏、察挙の吏の就官過程に生ずる私的情誼
|| 私情を、旧に比して一応薄くするのに成功した。しかし、どのような選挙制度下でも長官部下の間の私情は生ずる。九品
官人法下、周知のように、一旦辟吏となつたものの私情は長官任命の在官の吏の私情の一環となり、中央任命の部下もすべ
ての部下の私情に通ずる私情をもつに至る。右の辟吏以外の現吏、すべての故の吏の免官はその一端を物語る。(以後、故吏、
故の吏の免官がないのは国力の衰退による。それらの免官の有無は本来それぞれの政治体制の一環として考えるべきで、単
独では政治的意義を示さない。)

ところで、旧来、西晋時代楊駿が誅されたときその現吏も亦一旦獄に繋がれその罪が按ぜられたと考えられている。いま
それを右と関連づけて検討しよう。晋書^{卷十五} 潘岳伝に、

楊駿輔政。高選吏佐。引太傳主簿。駿誅。除名。時駿綱紀皆當從坐。同署主簿朱振已就戮。岳其夕取急在外。(公孫)
宏言之(楚王)瑋、謂之假吏。故得免。未幾、選為長安令。

とあり、潘岳伝に見える潘岳の閑居賦に、

領太傳主簿。府主誅、除名為民。俄而復官、除長安令。

とある。ここで晋書^{卷四十七} 傅祗伝を見ると、

(前略) 尚書左僕射荀愷与(裴)楷不平。因奏、楷是駿親。収付廷尉。祗証楷無罪。有詔、赦之。時又収駿官屬。祗復啓
曰、昔魯芝為曹爽司馬。斬関出赴爽。宣帝義之。尚遷青州刺史。駿之僚佐、不可加罰。詔、又赦之。祗多所維正、皆如
此。

とあつて、潘岳が俄に主簿に復官したのが、傅祗の啓に基く赦によることを示している。この際注目すべきことが二つあ

る。その一は「僚佐」の存在である。僚佐の語が長官のもとにある長史、主簿のような綱紀や参佐、辟吏を含んでいることに間違ひはない。官属は僚佐のうちの下級官を指し、辟吏を含むが綱紀や参佐を含まない。⁽³¹⁾（後引の晋書温嶠伝の記事とあわせ考え、）右の際、まず綱紀（参佐）が第一に重視され、ついで官属（たる辟吏）が問題とされたとして大過なからう。なお、通典^{卷九}礼五十斎^十續三月の項に、東晋時代の議として、

（前略）范甯議云、…甯謂、臣有貴賤。礼有隆殺。州郡綱紀察举辟命之吏、聞旧君喪、応即奔赴。在官之人、亦宜棄職而去。雖不皆与礼合、称情立文也。

とある。「在官之人」は「旧君」のかつての綱紀察举辟命之吏であつてしかも在官している人という意味であらう。⁽³²⁾州に辟吏はいない。従つてその辟命の吏は単なる長官任命の吏の意味になる。しかし郡には辟吏がいる。そうすると、旧君の服喪にあたり、辟吏は他の長官任命の吏と同質的に取扱われているといえる。以上の考察は結局「九品官人法という選挙制度が後漢時代のような辟吏の存在を許さず、各府の品官をすべて一旦九品官人法の対象となしたため、自らそこに官職の高低が長官との緊密度の強弱と相応ずる傾向が強まつた」という線にそつて理解すべきであらう。ちなみに、晋書^{卷六}温嶠伝に、東晋初期、王敦が叛を謀つて誅されたときのこととして、

時、制、王敦綱紀除名、参佐禁固。

とある。ここにも辟吏のことは現われてこない。注目すべきことの二は、官人が長官のために尽すのが当然であるという見解が採用されて楊駿の部下の処罰が赦されたことである。ここにはいろいろな問題が含まれているが、いま取りあげたいのは詔があつて楊駿の部下の処罰が赦されたということ自体である。閑居賦に「復官」とあるのはこれと相応ずる。（一旦行われやがて撤回された処罰は当然官資に無影響である。）なお、晋書^{卷五}陸機伝に、陸機について、

後太傳楊駿辟為祭酒。會駿誅、累遷太子洗馬著作郎。

とある。ここには楊駿の誅のことが出ている。けれども免官のことは見えない。蓋し、陸機は一旦太傳楊駿の現吏として免官されたがその免官が取消されたため敢てそれを記さなかつたのであろう。文選^{卷二}十四潘安仁の為賈謐作贈陸機に、陸機について、爰應旌招、撫翼宰庭。儲皇之選、実簡惟良。

とあり、その注の一つに、「臧榮緒晉書曰、太傳楊駿辟機為祭酒。」とあるが、これは陸機が太傳楊駿の祭酒となり、ついで皇太子の府に入つたことを述べたものである。そこにも免官のことは見えていない。

ここで晉書^{卷九}十二鄒湛伝を見ると、鄒湛について、

軫太傳楊駿長史、遷侍中。駿誅、以僚佐免官。尋起為散騎常侍。

とある。府の長史は綱紀の一つでもある、かつて僚佐、綱紀であつた鄒湛が免官されたことは、第一の故吏、第二の故吏も亦免官されたのを示唆する。しかしいままで見たとくからその免官処分が撤回されたのは明かである。なお、晉書^{卷七}十下敦伝に下敦について、

其鄉人郤詵才陵傲俊兄弟。俊等亦門盛、輕詵。相視如讎。詵以楊駿故吏被繫。俊時為尚書郎。按其獄。詵懼不免。俊平心斷決、正之。詵卒以免。

とある。郤詵が楊駿の故吏として獄に入れられたという際、彼が楊駿の誅死時その現吏であつたのか、それともそれ以前に故吏になつていたのか不明であるが、何れにしても彼が免かれたのは、赦よりまえとすべきであり、かつ彼が以後官人となつた際かつて楊駿の部下であつたことが、官資上無影響であつたとされよう。

前節と本節とはもとより九品官人法制定時に視点をおくものである。

(九州大学文学部助教授)

註

- (1) 旧来の代表的研究として、宮川尚志氏、「中正制度の研究」(『六朝史研究』・宮崎市定氏、「九品官人法の研究」・矢野主税氏、「治・社会篇」)・魏晋中正制についての一考察(『史学研究』(第八二号)・楊筠如氏、「九品中正与六朝門閥」などがある。
- (2) 官品と郷品との関連性については、前掲、「九品官人法の研究」参照。
- (3) 浜口重国氏、「唐の部曲・客女と前代の衣食客」(『山梨大学学芸学部紀要第一号』)参照。
- (4) 「用人」、「官才」の各一例をあげると、魏志^{卷十}「何夔伝に、「自軍興以来、制度草創、用人未詳。」とあり、晋書^{卷四}劉毅伝に、「臣聞、立政者、以官才爲本。」とある。ただし、晋書^{卷三}齊獻王攸伝に、「(前略)攸下令曰、：至於官人拔才、皆朝廷之事。云云。」とある。この官人は単に人を官吏にするといった意味であろう。もし官人之法の官人がこうした意味であっても、論旨に差支へはない。
- (5) 拙稿、「領軍將軍と護軍將軍」(『東洋學報』第四十四卷第一号)参照。
- (6) 漢魏交代については、宮川尚志氏、「禪讓による王朝革命の研究」(『六朝史研究』)参照。
- (7) 前掲、「魏晋中正制についての一考察」参照。また好並隆司氏、「魏王朝成立過程試論」(『社会科教育歴史』・地理研究論集)参照。
- (8) なお、後漢極末ごろになると、門生たることを基盤にして官達するのが困難になつていた。こうしたことについては別稿

で論ずる。

- (9) 劉毅はその上疏において、九品官人法を廃止し郷举里選にかえる際、あわせて土断を行ふべきを説いていない。そのため論旨がごたごたしてスッキリしないところがある。
- (10) 前掲、「中正制度の研究」参照。
- (11) のちにそうした状態は一変する。そのことについては別の機会に述べる。
- (12) 汪士鐸氏、南北史補志職官志第一選挙の項に、「按九品中正之法、起於建安。劉毅衛瓘李重、論之詳矣。」とあるが、劉毅、衛瓘、李重は別にそうしたことはない。
- (13) 拙著、「魏晋南朝の政治と社会」参照。
- (14) 皇帝と天子とその直接任命にかかる官人との関係は、人事権をもつ各官界の長官とその任命にかかる官人との関係と同質的な面がある(『魏晋南朝の政治と社会』)。本文に現れているのはそうした面である。
- (15) 増淵竜夫氏、「中国古代の社会と国家」・五井直弘氏、「後漢時代の官吏登用制「辟召」について」(『歴史学研究』(一七八号)・好並隆司氏、「曹操の時代」(『二〇七号)・鎌田重雄氏、「漢代の門生・故吏」(『東方学』第七輯)・矢野主税氏、「漢・魏の辟召制研究」(『長史学』第三輯)・川勝義雄氏、「魏晋南朝の門生故吏」(『東方学報』)など参照。
- (16) ただし、それが全然行われなかったというわけではない。その実例については、前掲、「漢・魏の辟召制研究」参照。
- (17) 五井直弘氏、「曹操政權の性格について」(『歴史学研究』(九五号)参照。

(18) 前掲、「魏晉南朝の政治と社会」参照。

(19) 前掲、「漢・魏の辟召制研究」参照。

(20) 田疇伝の注に、

臣(裴)松之以為、田疇不應袁紹父子之命。以其非正也。故尺規魏祖。建盧菟之策、致使袁尚奔迸、授首遼東、皆疇之由也。既已明其為賊。胡為復弔祭其首乎。若以嘗被辟命、義在其中、則不應為人設謀、使其至此也。疇此舉止、良為進退無當。与王脩哭袁譚、貌同而心異也。

とある。たしかに田疇の行動は一貫性を欠くし、また田疇は袁尚の辟吏となつていないが、それにしても、そこに当時第一の故吏が旧君に私的情誼をもつべしとする風潮があつたのを窺うことができる。

(21) ちなみに、秀才孝廉に察舉されたものが旧君の免黜によつて免官された例は見当らないようであるが、それは単に個人としての事例が見当らないというだけである。さきに述べた故吏の免官に(集團的に)それが含まれていたのはいうまでもなからう。なお、後漢書^{卷七十} 李育伝に、

建初元年、衛尉馬廖舉育方正。為議郎。再遷尚書令。及馬氏廢^{建初八年、順陽侯馬廖子豫為步兵校尉。育坐為所舉、免歸。}廖坐授書怨謗、豫免^{見馬援伝。}育坐為所舉、免歸。

とある。方正への察舉はいま取りあげている点では秀才孝廉への察舉と揆を一にする。ところで、後漢書^{卷三十三} 桓典伝に、桓典について、

孝廉為郎。居無幾、会国相王吉以罪被誅。故人親戚莫敢至

九品官人法の制定について 越智

者。典独弃官收斂、帰葬。服葬三年、負土成墳、為立祠堂、尽礼而去。辟司徒袁隗府、舉高第、拜侍御史。

とある。桓典が免官されなかつたのは、蓋し彼が免官されるまでに官を捨てていたからであらう。また、第一の故吏であつても、司隸校尉になつていた際そのものは免官されない(後漢書^{卷五十二} 袁滂傳)。これは司隸校尉のもつ特殊性によると考えるべきである。このことは六朝の監察制度を論ずるとき取りあげる。

(22) 繰り返して述べると、皇帝としての曹氏はその官人すべてを自らの臣とする。つまりその権力機構はすべて臣従者だけで構成されることになる。しかし旧来皇帝たる劉氏がその官人すべてを臣としていたにもかかわらず、その選挙制度において私的結合關係が生じたのであるから、曹氏がその官人すべてを臣としたにしても、旧来の選挙制度を採用する限り、またもや漢時代と同じ様態が生ずべきである。そこに曹氏が新らしい選挙制度を採用すべき必然性があつたのである。(人事権と私的結合關係)という観点から見た際、皇帝の絶対性は影が薄いわけである。

ちなみに、最初の九品官人法では、州の長官は中正の予撰その他に全然関与しない。これは同法が、後漢末強大な自立勢力をもつていた州長官の勢力削減策でもあつたのを物語っている。

(23) 本文の記事は、一見、諸郡の中正に公卿以下郎吏までを差絃させたのを物語るとされそうである。しかし、そう理解すると、中正の対象となる官人が郎吏(第六品)までとなつて「制九品」と矛盾する。(吏の語が第七、八、九品官だけを指すことはありえないであらう)また、右のように理解すると、諸郡

の太守あるいはその撰置した中正が公卿など（の皇帝親授）の官をも差敘したことになつてしまふ。このようなことはとうてい想定しがたい。なお、本文後引のように、

（王）嘉時還為散騎郎。馮翊郡移嘉為中正。

とある。ここに郡（の長官）がその郡の中正を定めるにあた

り、移という手續をへたのが示されている。

魏志^{卷十}王肅伝の注に、秘書丞であつた薛夏に關し、嘗以公事移蘭台。云云。

とあり、唐六典^{卷一}（尚書省）左右司郎中員外郎の項に、諸司自相質問。其義有三。曰、関刺移。

とあり、その注に、

（前略）移謂移其事於他司。移則通判之官、皆連署。

とあるが、六朝においても、官庁間に用いられる制度的用語としての移は、必ずや上下關係のない官庁間において用いられ

たものであらう。果してそうであるとすると、さきの馮翊郡の移の對象は、自ら司徒とならう。

ところで、通典^{卷十}選舉二歷代制中の項の注に、

按九品之制、初因後漢建安中、天下興兵、衣冠士族多離本土、欲徵源流、遽難委悉。魏氏革命、州郡俱置大小中正、各以本

人任。諸府公卿及台省郎吏有德充才盛者為之。區別所管人物、定為九等。

盛者為之。」とある部分は魏志常林伝の注の「差敘自公卿以下至于郎吏功德材行所任。」をいいかえたものであらう。このいいかえかたは魏志常林伝の読みかたに關する筆者の見解をささえるであらう。

（24） ちなみに、この記事は太平御覽^{卷二百六十五}職官部六十三中正の項にも見える。通典はこれを原拠としたと考えられるが、旧來問題とされている「為吏部尚書及郎司徒左長史掾屬」の記述は、これにおいても通典と同様である。

（25） 察舉制は稿を新たに於て論ずる。

（26） 前掲、「九品官人法の研究」参照。

（27） 前掲、「晉南朝の政治と社會」参照。

（28） 十二郡中正という表現は、要するに西晉時代（司馬氏の本貫たる）河内郡や鄭氏の本貫たる滎陽郡の屬する司州の郡数が十二あるため、その事實を司州の前身司隸に投影させ、（司隸の實際の郡数や郡中正数を無視して）司隸にも十二郡あつたとし、その郡中正を十二郡中正といつたものである。當時の司隸は河内郡と滎陽郡とを含むが、郡数はもつと少ない。

（29）・（30）・（31）これらについては別稿で論ずる。

（32） 前掲、「魏晉南朝の政治と社會」参照。

補（1） ここではもとの官属の免官だけしか見えないが、下級官たるもの（辟吏以外の）官属が免官された以上、それは當然もとの綱紀、参佐の免官に及ぶであらう。